
ねこのあいね

川中流一

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ねこのあいね

【Nコード】

N65540

【作者名】

川中流一

【あらすじ】

しとしと降る雨から逃れるように軒下に潜り込んだ仔猫がいた。傘をたたんだ玄関前、雨に濡れて体を震わせしゃがみこんでいるのを見つけた。

見上げる茶色の大きな瞳と目が合って数秒。

「ここにいてもいいぜ 一日30分、お前を俺の好きにしていなら」

それは小さな小さな迷い猫だった。

first piece*1

しとしと降る雨から逃れるように軒下に潜り込んだ仔猫がいた。傘をたたんだ玄関前、雨に濡れて体を震わせしゃがみこんでいるのを見つけた。

見上げる茶色の大きな瞳と目が合って数秒。

それは小さな小さな迷い猫だった。

熱いシャワーを浴びて、華奢な体にはだぶだぶの白シャツを着て暖かいスープをこくりと飲み込むのを眺めていた。全部飲み終わってから、初めて同じ言葉を喋った。それは綺麗な鈴の音だった。

「なん…で…？」

「可愛いから」

目の前にちょこんと座っている仔猫に微笑する。

「ここにいてもいいぜ 一日30分、お前を俺の好きにしていいいなら」

リビングのソファ、膝にだっこしてチョコレートを唇につんと当てると、ぴんく色をした小さな花びらは開いてそれを口に入れた。よしよし、と頭を撫でてから、頬張っている口にもう一粒チョコレートをつんと当ててみると、同じようにまた開いて中に入れる。面白くて何度か繰り返していたら、遂に両頬をハムスターのように膨らませてもぐもぐさせるので、可愛いらしく思っでそこで加えるのを止めて眺めていた。時々つん、と頬をつつくと形は崩れて片頬により、離すと戻るのでそれが可愛かった。

たったそれだけ遊んだら時計は半回転していたので、口の周りを布で拭いて仔猫を膝から降ろす。

「それ、気に入ったら食べ」

四半分残ったチョコレートの箱を目で指すと、ソファを立てて自

室へ行った。

『ここにもいいぜ　一日30分、お前を俺の好きにしてい
なら』

冷たい外に戻るのと、暖かい中から出るのが嫌でこくりと頷いて
いた。帰る場所はなかったし、自棄な気持ちがあったし、好奇心も
あった。それに　黒い瞳から目が離せなかった。

男の人のところに住み込むのに、ドキドキして頷いた。

だけど、その人は自分をずっと子供に見ているみたいだった。別
に遠慮している訳じゃなさそうで、本当に気まま思うまま自分で遊
んでいる。子供？猫？おもちゃ？どれかか全部を合わせたみたいに
約束の通り、一日に30分だけ。大抵は、お風呂も食事も終わった
寝る前の時間に。

それ以外は、本当に普通。どんな関係なのか分からなくなる程自
然だった。自分を気にする風も無く無視する風もなく、彼の生活は
「30分」以外何も変わらないようだった。

普通の普通のきつとこれが普通の生活。

大抵いつも、大体同じ時間、ソファで膝抱っこされて。

長い髪の毛を、丁寧に丁寧に櫛で梳かされた。

只管しりとりをしていたり、トランプをして遊ぶように遊ばれた。

腕にふんわり抱かれて頭をかい撫でられ、時折ぎゅっと抱きしめら
れた。

「30分」は心地よくて、いつの間にか終わると少し寂しくて明日
の「30分」が待ち遠しくて寝床についた。

それ以外は、構われない。というよりその人は大抵家を空けてい
て、不思議に美しい手料理を朝夕一緒に食べるのと「30分」以
外はほとんど一人だった。家で寛いでいる時は大抵本を読んでいる
邪魔しちやいけないと思ってぼつんと自分も本を読んでいるふりを

する。

昼はいつも置いてある牛乳とパンを勝手にもそもそ口に入れる。勝手に本棚から本を取り出して広げ、勝手に音楽を流してみる。勝手に30分以外の時間を潰していた。

「30分」は「構ってくれる時間」になっていた。

遅くに帰ってきて、疲れているのか膝の上に頭を乗せてソファに横になった。目を瞑ってやわらいですうすう、男の人の寝顔にドキドキしていたらぱちりと目があいて顔が一気に熱くなった。

顔を見上げられて「ぶ、」と吹き出してから、立つ。時計が言うには30分経っていた。

まだ……そう思った瞬間、ふわ、と何かされて、彼はさっさと部屋に戻っていった。

おでこを押さえた。額に、何か　ちゅう、されたと思う。ずつとぼけっとしていた。ぐーっとお腹が鳴ってから、気づいていそいそと寝床に入った。

いつものようにいい匂いに目覚めて、でもなんだか出ていけなくて、リビングの一角に作った寝床でもぞもぞとしていたら、起こしにくることもなくそのまま一人で食べてそのまま家を出て行った。ぱたん。

帰ってきたら、まだ毛布が丸くなってもぞもぞ動いていた。朝から具合が悪いのか、腹が減ってるのか、と思つてミルクを人肌に温めて平皿に注いでことんと置いてみた。そうしたらぴた、と止まつて、ちよっとして顔だけびよこんと出した。ミルクを見て、俺を見上げて、それからちよつと毛布から這い出てきてぺるぺると舐め出した。その様子が可愛かったので、喉を撫でて眺めていた。量が多かったのか飲むのが下手なのか、普通の猫よりも時間はかかったが舐めきつて、そうして何か褒めて欲しそうにじつと見上げてきたの

で、膝に抱えあげて頬ずりをしてやった。はにかんだ笑顔をして、ちよつと嬉しそうだった。

「この間から住み着いているんだ」

見せてやろうとしたら、人見知りなのか毛布の中から出てこなかった。人肌ミルクをことんと置いても湯気に誘われて出てきはしなかった。ぎゅ、と毛布を硬く握った小さな拳も可愛かった。

「ねえ、そんなことより」

家に知らない人が入ってきた。声が離れてちよつとだけ隙間を作つて覗いてみたら、綺麗な人に腕を組まれて部屋に入っていた。ぱたん。

「どうした？最近元気がないな」

膝にだっこされて、柔らかいタオルで風呂上りの柔らかい髪の毛の水分を拭き取っている。

返答を期待されてる訳じゃないから、タオルを被せられたのに則つて俯いたまま黙っている。

「帰りたいのか？」

どこに？帰る場所なんか、ない。……ない。

「いつでも出て行つていい……」

少しだけ落ちたトーンに胸がぎゅつとして、胸に振り向いてぎゅつとしがみつки、ぷるぷると首を振った。

「可愛いな……」

タオルの上から、男は頭に手を被せて少し哀しげに微笑んだ。

「愛音……」

そう呟くと、ぎゅ、と抱きしめる。

「あいね、あいね……」

名前は訊かれてないし、訊いてない。知らなくても毎日過ごせた。

だけど、初めて名を　今まで呼ばれていたのと違う名前だったけど、そう名づけられた。

「あいね……」

ちゅう、した。自分の唇を彼の唇に押し当てて、答えるように、ちゅうをした。

「あいね　」

微笑んで、また胸がきゅうとした。

白い大きなシャツのぼたんに手がかかって、ぷちんと外された。ぷちん、ぷちん。

first piece*2

ぴんくの花を咲かせた生クリーム色の肌で、くりんとした薄茶の瞳とぽちよんとしたぴんくの唇で、きょとんと見上げてそれから遅れて急いで頬を染めて少し俯いた。

生クリームを舐めてみて、ピンクの花を唇で摘んでみた。可愛い鈴がちりんちりんと鳴った。

「ふあ、ふあ」

うす甘くて、舐めて舐めて、おへそも爪も全部舐めたかったけど、ちら、と時計を見てぷちんぷちんと白い布を被せる。残りは明日に取っておこう。

全部を舐め終わってからは、今度は柔らかそうなところだけを甘噛みしてみた。みみたぶ、かり。もも、かり。おしり、かり。花びらの乗った小山を、かりり。

「ふあん、ふあん」

ぴくんぴくんと鈴を鳴らすのが可愛らしかった。

時間になれば潤んだ瞳でぺたんと座っている猫にシャツを被せぷちんぷちんと終わる。

その次は撫でて、ゆっくりゆっくり撫でて、全部を撫でて、柔らかいところは揉んでみる。

「ふああ、ふああ、」

生クリームがとろけそうで、花びらはいちごになって、舐める程にどんどん甘くなっていつているようだった。舐められた猫の方も気持ちよさ気に頬を染めて、夢心地のうっとりとした表情をする。ただどぷちんぷちんと戻すとき、猫は何か物足りな気な、寂しそうな顔になる。

ある夜、口元の涎も拭っていつものように元通りにしてから立つと、くいと下からシャツが引つ張られていた。頬の染まったまま上目に見つめて何も言わないし離さない。

「どうした？」

暫くしてから小さく口を開いて聞き取れないほどの震えた声で言う。

「あいねとつながるのはいや…？」

男はちよつと考えてから答えた。

「お前が嫌じゃなければ嫌じゃない」

「いや、じゃない」

何か懇願するような瞳で言った。

「あいねはつながりたい」

「あいね……」

頬に手を添え人間になった猫と見つめ合う。

唇を割って、その温かくて小さな中を舌でまさぐった。舌と舌を絡めて繋がってすぐ解けてまた繋げて、華奢な猫の息が苦しくなるまで口付けた。

それは半回転の夢の中の出来事。

惚けて頬の赤いままの猫にぶちんぶちんと服を着せて、夢は終わる。

寢床の固いことに気が付いて、猫を自分の布団にくるんで入れた。

「温つけえ……」

それから可笑しくてくす、と笑う。

「猫なのにな」

人肌の温かさに滑々の肌心地の抱き枕を手に入れて、柔らかい猫毛に手を絡めて抱いて眠った。

それは夢の始まり。

女はいらない。猫がいる。帰るといつも待っている猫がいる。抱いて口付けて抱いて抱いて寝よう。

猫、猫、仔猫。小さな子猫。戻ってきた俺のねこ。

鼻歌でできたかぼちゃのスープをことんとテーブルに置き、窓際に目をやる。仔猫は目を細めて日向ぼっこをしていた。

「あいね、ご飯だぜ」

そう呼べばすぐにぴくんと動いて嬉しそうにやってくる。無邪気に笑う顔にやすらいで頭を撫でた。ふーっとやって食べさせてやる。「うまいか？」

こくと頷いて、あーん、と言えばまた口を開けて待った。

食後には人肌の甘いミルク。床に置いた皿から嬉しそうにぴちゃぴちゃと好物を舐めた。

「人間になってもミルクは皿なんだな」微笑んで男は眺めた。

本から目を上げると、窓外を見ていることが度々あった。気を紛らわせないかと構ってやるが、やっぱり外を見ることが多くある。

「……出たいのか？」

じつと顔を見てから首をふるふる振って、だけど何うようにちらっと見る。

「散歩しようか」

そう言つと嬉しそうにこくと頷いた。

元に着ていたひらひらの服を着て、手をきゅ、と握る。

「いいか？絶対離れたらだめだぜ？車があつて危ないんだからな」何度も頷いた後、随分ぶりに靴を履いた。てくてこと外の空気を吸って歩く。もう随分冷たい空気になっていた。散歩に丁度いい交通の少ないところを歩いて、たまに車が来るとちよつと止まって抱

き寄せた。

「楽しかったか？」

うきうきした気持ちのままこくこく頷いた。

「そうか」彼も微笑むが、それから両肩をきゅ、と掴んで不安気な顔をした。

「いつでも連れて行つてやるからな　だから……絶対に、ひとりで行くのはだめだ。必ず俺と一緒にのときと約束してくれ」

小指を差し出してみせると、彼も顔を崩してそれに指を絡めて少し振った。

「いいこだ」

それからきゅ、と抱きしめた。

「あいね……もう二度といなくならないでくれ」

こくんと頷いて、手をきゅ、と回す。

「温つけえ」

彼は甘いカラメルのような焦げ茶の頭に呟いた。

「本当に、良かった　もう冷たいお前を抱くのは嫌だから……」

猫は大事にされて、恋した猫も幸せだった。

だけど突然に、猫と男は引き離された。

連れ戻されたお嬢様は、自分は猫だと言い張った。猫の生まれ変わりだと言って、元の飼い主のところに帰りたいと言って泣いた。泣き続けて、泣き続けた。何も食わず、ミルクだけ皿にあけて舐めていた。

とうとう衰弱して、釈放された男が連れて来られた。

猫は泣いて抱きつき、男はちよつと困ったようにぎこちなく撫でてから離れた。

「すまない」

離されて不安気な顔に男は言う。

「焦茶の毛で薄茶色の瞳の仔猫を飼っていた。……事故で死んじゃったけどな。それももう、随分昔。ガキの頃の話だ。忘れていた」

「ちょっと瞳を瞑ってから、また開ける。」

「お前を見るまで」

「ただ、懐かしさと同情と面白半分で置いただけだった。暫くしたら出て行くだろうと」

男は自嘲するように額を押さえた。

「けどいつのまにか、なんでそうなったのか　人間に生まれ変わってやっと俺の元に戻ってきたんだと、本気でそう思っていた。信じらんねえよな、なんで俺が……。ガキの頃、人間にならねえかな、と思っていたせいかもしれねえ」

彼は少女を見つめる。

「すまない」

しかし少女は再び縋るように抱きつき、泣いて首を振った。

「やだ。ちがう、あいね……。生まれ、変わり……！」

「『生まれ変わり』だと　俺とお前で約束したとしても、そうは生きていけない」

ふ、と物悲しげに男は微笑した。

「少なくとも、今のお前は人間だからな……」

少女は涙目でふるふると振って男のシャツを握った。

「ね……！」

「それで本当に辛いのはお前だ……。俺は『あいね』を見ている。お前じゃない」

「ね、こ……！」

「遊び半分で……本当にはかなことをした。まだ引きずっていたなんてな……」

少女はぎゅ、と服を握った。

「好き…！」

「ごめんな……」

男は呟いて少女の頭をもう一度撫でた。

「お互い、忘れようぜ」

くるりと背を向けて、かっかつ去っていく。

「さようなら、あいね」

「ありがとう」

ふああ、ふああ、と鳴き声が聞こえる。

second piece*1

「なあ、婚約したと言っただろう」

「ああ、言っただな」

ガラス張りの高層ビルのテラス、休憩中のエスプレッソコーヒを立ち飲んで男はぞんざいに答えた。

「確か提携グループ先の会長の愛孫と。これでこの会社も安泰だな、お前がへましない限り」

「釘刺すなよ……」はあ、ともう一人はため息をつく。

「大変だな、社長の子息っていうのも。俺には遠くて縁も持ちたくない世界だ」

「社会がある限り政略結婚は永遠に続くのさ」

「愚痴は終わったか？」男は腕時計をちら、と見て言う。

「薄情だ……相変わらず薄情だな。まだ何も話していないじゃないか」

ちよつとため息をついてから男は今度はアメリカンコーヒを注文し、立ち飲みのカウンターからソファ席の向かいにぼすんと幾分投げやりに腰を下ろす。

「それで？」

「変なんだ……はつきり言うと、頭がちよつとおかしい」

口は固いよな？と言ってから彼は周りに人のいないのを確認して言った。

「初めは、大人しい砂糖菓子のような子でラッキーだと思った。こういう結婚じゃあ何せ大人しくないとイケない。それに外貌も良いやあ、かなりの好物件だと思うだろ」

「けどな……」彼は一段と声を顰める「猫の真似をするんだ」

男は怪談でも話すように気味悪気に声を低くして言った。

「皿に開けた牛乳をな、手を使わずに舐めるんだ。床に置いて……」

「……へえ」

「前に起きた家出騒動から一層人見知りになっただらしくてな、自分からはほとんど喋らない。外聞の為にもみ潰されたが、あれは

本当は誘拐事件でその後遺症らしい。一体何をされたんだか、変質者っているよなあ……可哀想に」

黙って聞いていた男は立ち上がった。

「話はそれだけか？」

「待てよ、薄情もの」

「可哀想でも自分との結婚となると話は別か」微妙に冷笑して男は見下ろす。

「それはだって、なあ……それに俺は元々大人系の肉付きのいい女がタイプなんだ」

「それで、大人しいのがいいんだろ。不倫する為に 何も問題ねえじゃねえか」

「他人事だからそう言えるんだ。自分の身に振りかかってみる、幾ら美少女の令嬢でも、精神障害の妻をもらうなんて」

「いずれにしろ、他人事だ」

男は背を向け遮ると、緩めたボタンを閉め直しそのまま行ってしまった。

*

舐められて、くすくす、とくすぐったそうな笑い声を上げている。お嬢様は猫と戯れている。

人前ではめつきり笑わなくなったが、この黒猫と戯れる時だけは楽しそうに笑い声を立てる。うっかり微笑ましく見ていると、猫を舐め返そうと舌をちよろ、と出したので慌てて止めた。

「お嬢様、いけません」

少ししょんぼりするが大人しくやめて、うんしょと猫を膝に乗せ代わりに繊細な指で毛づくろいを始めた。猫は猫で、膝に収まり切

らない四足を床に垂らしてふてぶてしく寛いでいる。懸命に毛づくろう様子は、どっちが主人か分からないようだった。

傷をつけるかもしれないので屋敷で動物は飼ってはいけないことになっていたが、誘拐騒動以来傷心して部屋にこもっているお嬢様を庭に連れ出しての散歩中、一体どうして入って来れたのか敷地内に黒い野良猫を見つけて、お嬢様がどうしても離さないもので内緒で飼うことになったのだ。内緒と言っても猫は気ままに出て行くしお嬢様はついていくので、使用人は皆承知で、内緒にしているのはお祖父様に対してだけだった。それも別館の主はお嬢様だったので、取り立てて隠すこともない、ただ暗黙の了解だった。

窓際でお嬢様が猫を膝に抱く様子は、なんとも絵になっていて思わず頬が緩んでしまう光景だ。

「なんという名前なのですか」

「知らない」

「お名づけになってはいかがですか」

「でも……何も知らない」

哀しげな瞳で猫を撫でて言う。

お嬢様は人とはどこか感受性が違うようだった。親を亡くして生み残されたお嬢様は護衛つきでの許可さえ滅多に出されず、使用人も専属の執事以外とは喋ってはいけずに家庭教師もうやうやしく、そんな屋敷の中だけで育ったせいかもしれない。どこかぼんやりと哀しげで、何にもこくんと言われるままに従って逆らわない。だから家出したというのも俄かには信られず、しかし誘拐とされたのを泣いて違う違うと食事も拒否して言い続けたのには皆驚いた。

気持ちよさ気に眠りだして、ぴくぴくする猫の髭に興味を持ったのかお嬢様はつんと引く張る。気づいたときには途端に目覚めた猫がぱしん、とお嬢様を叩いていた。

「お嬢様！」

顔を押さえたお嬢様は、びっくりして、それから猫の機嫌を損ねたことを知っておろおろしだした。

「ごめんなさい」

膝から降りた猫に自分も四足になって謝る。猫は大きな猫にしゃーつと毛を逆立て、お嬢様は余計に泣きそうになって必死に謝る。ふん、と猫はそっぽを向いて窓を向いた。

「だめ、だめ、いけないで」

お嬢様は立ち上がって捕まえようと手を伸ばしたが、猫はするりと抜けてしまう。

「ああ、ああ」

たん、と行ってしまった黒い姿を追いかけて窓から身を乗り出したお嬢様を押さえてなだめる。

「おいてかないで、おいてかないで……」

「帰ってきますよ、お食事の時間には」

夕刻、本当に知らぬ顔で帰ってきてにやあと頬を舐めた猫にぐずっていた涙を引っ込ませて笑顔になる。ミルクを並んでぺろぺろ舐めて、この時が一番幸せそうで、とても誰にもやめさせることができなかった。

*

「結局結婚するのか」

「断れないに決まってるだろ」

茶髪の男はあっさりと答える。

「それにしても早いな、まだ2、3回しか会っていないんだろ」

「決まってることだ。何回も会ったって仕方ないだろ。あっちはあつちで、俯いてうんともすんとも言わないし」

「……それでいいのか」

「そんなものだ」そう言ってから、どこか物憂い感じで壁に寄りか

かる男を面白そうに見る。

「お前らしくないな、もつとビジネスライクに考える。ただ籍をいれるだけでどれだけのものが手に入るか分かるだろ？しかもあの爺さんも年だ。あの家出騒動も経て、一人残すことに不安を持ってこの話を進めたんだろ。それで息のあるうちは手元に置くつもりらしいから、俺の自由な生活は当分変わらない。それに少々頭がおかしくても他は文句のつけようもない。ハーフでしかも男も知らないような15の娘だ。確かに幼な気だが中々どうして肉付きは俺好み

ここまで聞いて話を蹴れる男がいるのか？」

「15？本当に犯罪じゃねえか……」男は頭痛を催したように額を押さえる。

「滅多なことを言うな、16の誕生日に結婚するんだよ。それまでお預けだ」

「そうか……割と真面目に生きてきたのにな。 出国の準備でもしておくか」

「何言ってるんだ、そう落ち込むなよ。確かに表向きフランクには付き合えなくなるかもしれないが、俺はそうバカじゃない、お前が影にいたから七光りも光れたんだ。出世してもらってから、これから頼むぜ？ それに、遊びでは今までどおりでいいしな」

至極朗らかに、ぼん、と肩を叩いて慰める友人に、男ははあ、と深くため息を吐いて一言答えた。

「どうも」

「僕と結婚してください」

全ての了承を取った後、夜景のよいレストランで形式だけのプロポーズをした。こくりと頷くだろうと思ったが、少女は相変わらず俯いて答えないのでここにきて緊張した。断られる場合もあるのだろうか。何にも逆らわなさそうなの娘が。そう言えば家出をした

んだっけ。

「……けっこん、したら」

徐むろに口を開き、綺麗な音が聞こえた。初めて声を聞いた気がした。

「なめてくれますか」

「え？」聞き間違えて聞き返す。

少女はぱ、と顔を上げて見上げ、訴えるような潤んだ瞳で堰を切ったように続ける。

「抱っこしてくれますか」

「なでてくれますか」

「一緒にごはんを食べてくれますか」

「一緒に寝てくれますか」

「手をつないでくれますか」

「キスをしてくれますか……」

男は呆気にと取られて見つめていたが、何か不思議な感情に突き動かされて、やがて白くか細い手を握った。

「はい」

すると少女は、笑顔というには心元ないが表情を幾分緩ませ、鸚鵡返しするように小さく答えた。

「はい……」

小粒の水晶玉が一つ、頬を伝ってきらりと輝くのに合わせて男の喉がごとくと動いた。

「初めてだ、あんな感じは……守ってやりたい。あれを見てそう思わない男がいるか？」

「そりゃよかったな」

何か熱に浮かされて語る同僚に、もう一人は答えた。瞳は雨空を眺めている。

「婚約パーティーは空けて置けよ」

「いや、空いていない」

「何言ってるんだよ……まだ日付も言っていないだろう」

「面倒は起こさないに越したことはない」

「拗ねるな、拗ねるな。まあ、お前もそのうち……突然なんだよ、恋っているのは。言っても来てみないと分からないだろうけどな」

「突然、か……」

瞳を瞑り、何か思い出したのか、ふ、と笑った。外ではそんな雨がサアサアと降っていた。

second piece*2

白いウエディングドレスに黒い猫を抱えて、少女は椅子に座っていた。

「お嬢様、毛がついてしまいます」

何度そうたしなめられても少女は猫を余計にぎゅ、と抱くのだった。

「お嬢様、時間ですよ。さあ、」

少女はぼろぼろと小粒の涙を零した。

「お嬢様！？ お化粧が取れてしまいます」

慌てて周りの者達がぼんぼんと布で押さえるが、声も上げず顔も崩さずやはりぼろぼろと小粒の水晶のような透明の涙を零すのだった。それが猫の頭にぼろんと落ちて露の如く光り、猫はぴくんと髭を動かしてたん、と膝から滑り降りた。

「あ、」

お嬢様は止めるまもなく立ち上がって追いかけていく。

「待つて、待つて」

「お嬢様！」

続けて扉を出たときには、角を曲がった猫の姿もお嬢様の姿もなかった。周りの者達は不安げに顔を見合わせる。

「待つて、お願い、行かないで！」

白いドレスが土に汚れるのも厭わずがさがさと道を外れ猫を追いかけていく。茂った木々の中を追いかけて、引っかかり、転び、追いかけて、追いかけて。遂に先には開けた草地が見えた。

人気のない、建物裏の芝生で煙草を吸っていた。がさ、と音がしてまたどこから入り込んだのか黒猫が現れ、真っ直ぐすたすたと自

分に向かってきた。真っ直ぐ真っ直ぐ、ぶつかる気なのかとでもいう程自分目掛けて向かってくるので、灰皿にとんとん、と吸殻を落として膝を折りそれを抱き上げる。そう意図していたように、なんとも自然な流れで猫は自分の腕に収まった。

「なんでたまに猫に好かれるんだ、俺は？」

喉をかり、とかくと黒の雄猫はにやご、と鳴いた。
がさ

茂みから音がして、今度はぼろぼろの白い花嫁が現れた。

瞳が合つて数秒、前にもこんなことがあつたような、と思つていと花嫁はかくんと膝を落とす。

「おい、大丈夫か？」

思わず駆け寄り両肩を支えると、それはあの潤んだ瞳で自分を見上げる。

「好きです……」

膝の折れたまま、ぎゅ、と自分の腰を掴んで抱きついてきた。

「お前……」

男が何か言おうとして二の句がつけないようでいると、少女は大きな薄茶の瞳で見上げる。

「お嫁さんにしてください」

「無理だ」

その瞳に向かつてきつぱりと男は言った。

「ねこでもいいです、あいねをもう一度飼ってください」必死な瞳が訴えた。

「その名を使うな。……お前じゃない」

「生まれ変わりです」

頼りなさ気な華奢な体を少し震わせつつも、薄茶の目で真っ直ぐ見上げて少女は退かない。

綺麗な焦げ茶の毛……潤んだ薄茶の瞳……15歳……15年前……
流れた冷たい

『あいね、あいね……次は人間に生まれて来い。そうしたら』

ふ、と笑った男の手が伸びた。

「帰るぜ あいね」

「はい……！」

少女は涙を零してこくと頷き、差し出された手をぎゅ、としっ
かり握った。

幸せそうに男に寄り添い、白い花嫁が歩いていく。

「え」

少女は前にぼん、と出された。繋がれていた手が離される。

「よかった 全く、心配かけるなよ」

茶髪に白の燕尾服を着た男が少女をしっかりと抱きとめる。

「え」

「自分の花嫁くらいちゃんと見ておけ」やれやれ、と少し笑って黒
い男が言った。

「そうだな ありがとう、見つけてくれて。お前は本当にどんな
時も仕事を成功させてくれる」

じたばたと腕の中でもがくので「悪い、苦しかったか？」と緩め
て離す。

「え」

少女は自分を連れて来た男を見上げた。訳が分からないような、
分かったような、哀しい困惑で見つめあげる。

「え、」

「なんで……どうして……どうして……」

「嫌い?……キライなの? あいねのこと……きらい?」

うる、と涙を溜めて、自分でない方を一心に見上げる花嫁を花婿は困惑気に見、そして男を訝しげに見やる。

「あいね……て、何だ? どういうことだ……?」

「『後遺症』の名残じゃねえか? 一人で迷って動転していたところを俺に見つけられたんで何か倒錯しているんだろう。 慰めてやれよ。好きなんだろ、そいつのこと」

「ああ、そうか。 ああ」男は納得し頷くと、もう一度細い肩を自分に寄せ背に手を回してぽんぽんと軽く叩く。「大丈夫だ、もう大丈夫だから落ち着け」

「式は1時間でも遅らせるか? 何か余興をやらせて埋めておくが」

「ああ、そうだな。折角の晴れ日だ。化粧もしなおして衣装も替えないとな。一時間もあれば気持ちも落ち着くだろ 頼んだ」

「おう」と手を上げて男は去っていった。

出たがるようにもがくのを腕に閉じ込めて、ぼろりと出た涙を白い胸ポケットのハンカチで拭く。

「逃げないでくれ、泣かないでくれ、お前を責めたりなんかしないから。こんな広いところじゃ迷うのも仕方ない。それに……」

男はぼろぼろの衣装を見て柔らかに微笑んだ。

「こんなに必死に、俺のところに戻ってこようとしたんだろ?」

ふわふわと声を上げて泣き始めた少女の頭をゆっくりと撫でた。

黒い背中、ばたんと閉まった扉の中に、とうとう消えてしまっていた。もう黒猫の姿さえどこにもない。

「神サマも中々に意地が悪いな……」

ふーっと白い息を吐いて、吸殻を踏み潰すと男はステンドグラスを背に教会を後にした。

「次は野良猫同士で、出会わせて欲しいもんだぜ」

天使達が祝いを奏でるラッパの音が、空高く響き渡っている。

third piece*1

「ふわん」

「かわいい、かわいい」

陶磁器のような滑らかに白い肌をそつと抱きしめる。

「何か欲しいものはないのか」

「……ねこが欲しいです」

「猫か。猫は苦手なんだよな、引っかいて危ないしな。犬はどうだ？」

ふるりと首を振る。

「そうか…どうしても猫が欲しいのか？」

ふるりと首を振り、何故か隠れるように布団をきゅう、と被った。

「もしかして寂しいのか？」

布団からはみ出ている長い焦茶の髪を撫で梳いて機嫌を取るように優しく声かける。

「そうだよな、ごめんな、出張ばかりになって」

それから少しぼやき口調になって独りごちた。

「全く、あいつが裏切らなければ あれほどの高待遇を蹴ってよくあてもなく一人で独立なんかができるよな……憎らしいことにうまくやってるみたいだが、大変だろうな。それでも牛後となるより、てやつか」

顔を半分だけ出して何か心細さそうに覗く瞳に気がついて、嬉しそうに頬をなでる。

「大丈夫だよ、俺だって一応優秀だからとお前のじいさんに見初められたんだからな。心配してくれたんだらう？」

ふるりと首を振る。

「それはそれで寂しいな」

はは、と笑って髪をさらりと撫で甘い声で問う。

「なあ、俺がいない時は何してる？」

「……考えてる」

「俺のこと？」

ふるりと首を振る。

「チヨコレー」なんだよ、食い気か」

男がぎゅ、と頬を軽く引つ張ると、女はふあ、と声を漏らす。

「お前はいつになつても全然、俺のものになつた気がしないな。初めてだよ、こうも手ごわい女は。分かつてるんだぞ？従順な振りして、実は誰にも警戒を解こうとしないってことは」

布団の中でさわさわと腿を撫でるとそれに合わせてふわふわ言う。はは、と朗らかに笑つて手を離れた。

「なあ、今度のパーティには来ないとだめだぞ。結婚したてなのに妻が同伴しないなんて格好がつかないからな」

女は長い茶色のまつげを伏せて、男はなだめるような口調で言う。一緒にいるから。まあつきあいもあるから少し席を外すかもしれないが……お前も他の奥さんと仲良くすればいいだろ。そういうのも夫人の仕事の一つなんだぞ、家事やらがない代わりに」

「はい……」

「そういう顔しないでくれよ、いい加減甘やかしすぎだと説教されるんだ。そうだ、それにほら……あいつも来るんだ。お前が式場で迷ったときに見つけてくれた奴。あいつもパーティに出るのは珍しいから、この機会にお前もあの時の礼をしるよ。俺の友人でもあるからな」

「は、はい」

「なんだ、上ずつて可愛いな。あの時は気が動転していたからなあ。大丈夫、俺がついててやるから恥かしくないぞ」

「一人で大丈夫です」急いで女は言った。

「ほら、全く……お前は人の気持ちというのを考えないな」

「……ごめんなさい」

少しため息を吐くと叱られた子供のようになんぼりとまたまつげを伏せるのを見て男は顔を和らげる。

「いや、言い過ぎた。下手なだけだな。それに、そういうおべっかを使えないところもかわいい」

男は布団に隠れた細指に手を絡め、白く甘いからだを胸に寄せた。
「ほら、何か甘えてこいよ。そうだ、舐めあいつこをしよう。お前、舐められるのが好きだからな」

そう言つてぺろりと薄く色づく頬を舐める。女はふあ、と言つて目をぎゅ、と瞑つた。可愛くて仕方が無い。

「ほらほら、」と言つて男はちよっかいを出す男の子のように楽しそうに舐めていった。

*

ぼつんと椅子に座つてもぐもぐぐくと口の中の食べ物をつみ下していた。

立食パーティで、周りの空席の人達はほとんど皆会場で立ち回りがやがやと紹介やら気の利いたおしゃべりやら軽い商談までも話をしていた。ひと休憩に座っている人も、大体皆、新しく気の合った人や馴染みやらと連れでチョコレートのかかったフルーツやらプディングやらを口にしながら休むまもなくおしゃべりをしている。

一歩後ろをついて、次々とやってくる人達の挨拶を受けていたのだが、色とりどりのドレスと香水が立ち代り立ち代り、好奇心で次々に鑑賞されそれで自分を連れている人が褒めそやかされるのを聞いているうちに、くらくらとしてきた。檻に入れられて見世物になつて珍らしい生き物と、未開のジャングルで勇敢にもそれを捕獲してきた冒険者だった。泣きそうになると、その様子に気づいたのか、パーティにはあまり慣れていないから、と手を引かれ元の椅子に戻された。

「少し休んでからにしよう」と言つて、「何か料理を取ってくる」と行つてしまった。

料理と香水の匂いが体臭と熱気に混ざり、なんだかぼーっとして

きたので少し外で涼もうと席を立った。赤いカーテンが降ろされて隠れているバルコニーがある。外からは見えない。あそこにしよう。

さあつと、新鮮で涼しげな夜の空気が肺を潤し肌を撫でる。吐きそうだった気分が嘘のように引いていく。今まで毒気の中にいたようだった。

「ふあ……」

星の散らばる夜空に深呼吸。都会の喧騒から離れた別荘地は涼やかで空はパノラマのように広く、ベランダからは湖面が黒い鏡のように丸い朧月を映していた。

「な……」ぽつりと小さな声で呟いてみたのが空気を透き通って気持ちよく響く。

「ねこねこ、こねこ、ちいさなこねこ……」気分が良くなって、歌うようにくちずさんでみた。

さあ、と湖面を揺らした風にぷるりと肌が粟だった、が、ぱさりと何か人肌の温もりに包まれた。

「そんな薄着で外に出るもんじゃないぜ」

夜に紛れていた黒いジャケットがイブニングドレスの肩にかかり、白シャツの姿が浮かび上がっていた。

「夜のパーティーには上着を一枚用意するのがオススメだ」

ふ、と笑って黒い靴がかつときびすを返し「あ、」とその背に思わず手を伸ばす。

「ありがとう」くしゃ、と掴んだ白シャツが皺になった。

「どういたしまして？」くすりと口元はおかしげな。

「お話、いかがですか」

「結構」

「するように、言われて」

「旦那に？」

いつまでも掴んだままのシャツに更にぎゅ、と皺が寄り眉がより、震える肌でこくと頷く。

「それじゃ逆らえないな、少し『お話』頂いていこうか」

どこか面白げに滑らかに歌劇のような台詞を言って男は向き、小さな顎をくいと指に引つ掛けた。

「ホットミルクでも飲みながら」

それから欄干に手をつきふわりと体が飛び越え夜に消える。驚いて欄干に身を乗り出し下を見ると、たと地に着いた男がやはり口元に微笑を浮かべ劇があったようにこちらに手を伸ばしていた。

「おいで、仔猫。伽の話を聞かせてくれるんだろう？」

夜と同じ瞳に誘われるままに怖気もせずには白い欄干から落ちていく。

とさりと信じられないような柔らかさで体は受け止められた。地に足も着かずに体重の全てを腕に任せて。揺れる心地に瞳は半目に、足音も立たない黒猫のようなしなやかさ、光りを背にして夜の中に包まれていった。

黒いジャケットはバルコニーに。

third piece*2

ことんと置かれたマグカップにホットミルクが白い湯気を上げて
いる。

「ここ……？」スイートルームのような、薄明かりの落ち着いた部
屋。開放的な大きな窓はやっぱり黒い湖面を映している。

「お前の旦那から今夜の招待客に宛がわれた部屋さ」

ほら、パーティ会場が見えるだろ？と湖面の向こう、白壁に赤の
屋根のヨーロッパの小さな宮殿のような建物が中の賑やかな光に浮
かび上がっているのを視線で指す。

「パーティ嫌いの俺に気を利かせたのか、それとも順当通りにここ
が末席か、あそこから一番遠いヴィラだ」

くす、と男は笑って自分を見る。「俺としては後者のほうが望ま
しい」

ミルクを促し微笑みかける。

「体が温まったらまたお城に送ってあげよう」

こくこくと人肌より温かく甘くに体を巡る。

「チョコレートと一緒にどうだ？」

こくんと頷き、摘まれた金色の包みに手を伸ばすとそれは包み溶
かれて唇の前に、甘い力カ才が鼻腔に広がりくらりと酔って、早く
欲しいと口が開く、とろけて舌がチョコレートになる。

「もつと欲しいだろ？」

瞳も口も半開きで、甘さに溶けた思考で言われるままに頷けば、
溶けきらない口の中に甘く苦く甘く甘く媚薬のような黒いお菓子が
入ってくる。チョコレート、チョコレート、もつと蕩けてもつと溶
かしてもつと焦がして、足の爪先まで体中にチョコレートが詰まっ
ていく。それでも欲しくて口を開けば、小鳥の餌のようにチョコレ
ートは降りて来る。ああ、なんて幸せな。このまま溶けてチョコレ
ートになってしまいたい。

ねだることに丁寧に金紙が剥かれるのも焦れつたくて、遂には剥いている指ごと口に含んでチヨコレートを舌に絡めかけるが、甘すぎた口直しに硬い触感に舌移りして、覆うチヨコレートをなすりつけるように舌を押し付ける。少しひんやりして固く固すぎない舌心地に夢中になって、先まで舐めていって、だけど手首より先は白いシャツが阻むように邪魔をする。せがむように見上げると、笑った口元がこう言った。

「もうお終いだ」

箱の中には小山となった金色の包み紙だけ。

「なんであるかっていうと、俺の夜の愉しみだったんだぜ？」

気づいた時にはもうチヨコレートの舌は貪られていて、齒列なぞられ唾液も何も全て絡め取られていく。口いっぱいに蕩けすぎたチヨコレートはもうすっかり綺麗になって、ほろ苦い香りに心も落ち着いていく。

「俺はコーヒーと合わせるのが好みだけだな」

離れた口元は冷めかけたコーヒーを飲み干した。

「さあ、もう十分温まっただろう？」

ふるりふるりと首を振る。

「まだ……」

「もう時間だ。時が経つほど抜け出した明かりは目立っちまう」

「明かりいらない」

シャツに頼寄せて、当たったボタンを細指で外す。ぷちんぷちん。

「本当に甘い躰だな」

ふるりと首を振る。

「うつん、お仕置きのほうが多い……」

「へえ……」男は意外そうに、遂にシャツの最後のボタンを外す茶色の頭を見下ろす。「お前が悪い子だからか？」

「うつん……だから皆一緒にいてくれない」

それでも自分の背に手を回してフックを外しファスナーを流しするりと纏っていた布から抜け出る。乗りかかる。男は押し返す。

「どうして肌をくつつけるのがわるいこと？」

それでも逆らうように柔い頬を固い胸板にぺたりとくつつけ、
けど胸の膨らみのせいでくつつけずに、それでもぎゅ、ぎゅとくつ
つこうとする。

「さあ……結構気が合うな。どうして肌を合わせるのが一人だけで
ないといけないんだ？」

「いけないんじゃない。欲しいのが一人だけ、」

「それが手に入らなかつたら？」

「ずっと考えてる……」

それからぺろぺろと舐めだした。

「もう一度生まれ変わつたら……次は猫に生まれて来たら、そうし
たら　ずっと一緒にいてくれますか……？」

「……恐いことを言うな」男は辛く厳しく女を睨める。「生きてい
る間に、お前は何度死に顔を見せるつもりだ？」チョコレート色の
毛を撫でて哀しく低く。

「あれで十分願いは果たせただろう？それなのに　」

「前よりももっと……繋がりたい」

「ああ、」ぱちんと明かりが消える。

「なんて人間は我侭なんだ」

金の包みにカカオと砂糖とウイスキー、混ざり合い蕩けて一つに
なっていく。

「　そろそろ起きろ……」

重なる固い肌が気持ちいい。そこにいるのを確認するように首に
手をまわしながら、ブラインド越しの光りも眩しいけども薄っすら

と瞳を開ける。

「え」

そこにいたのは違かった。いつもと同じの、違う人だった。

「おはよう、お寝坊さん。もう昼時だぞ」

「夢……？」くたりと手を離して呆然とその顔を見上げる。

「夢みたいだったなあ……」

「昨夜、消えたと思ったら部屋のベッドでドレスのまま眠り姫になっ
つていて、キスをしたらあんなに可愛いく求めてきて……あんなに
感じたのは初めてだろう？」

男はくたりとしている体を抱き起こして首元を唇で触れる。鎖骨、
胸元へと赤いマークをなぞっていく。

「こんなにつけたんだな……覚えていないか？お前、昨夜は本当に
甘えてきて……凄かったんだぞ？」

それから悪戯気ににや、と笑う。

「いつもあんなに素直だったら、お仕置きなんかしないんだからな」
「……嘘、」

「ああ、本当に覚えてないんだな。昨日は何か酒を飲んだだろう？」
ふるりと首を振る。

「アルコールの香りがしたぞ、チョコレートのカクテルかな。ジュ
ースと間違えたんだろう」

男はにこにことして言う。

「なあ、今度からちよつとだけ……お酒を舐めてからにしような」

「あ」女は枕元に手を伸ばした。

「なんだ？」ちら、と見て「ああ、ごみか」と気に留めない。それ
は小さな手にくしゃりと隠れた。

「パーティーは？」

「終わつてるとも。招待客も午前には帰ったよ、皆ビジネスがある
からな。昨日は一人にしてごめんな、古参のご意見番に捕まって……

……今度は二人だけで来ような」
ふるりと首を振る。

「パーティ……また、来たい」

「そうか？」男は嬉しそうにしながらも少し呆れる。「全く、お前は天邪鬼だな」

「なんにしろ、良かった。大事な社交の場だからな。食わず嫌いはダメだぞ？」

「はい」

「よしよし、いい子だ。最後にもう一回可愛がってやろうか」

男が押し倒すと女は胸を押し返すようにする。

「おなかと背中いたい……」

「そうか、そうだな。でも結構自業自得だぞ？」

ぶに、と頬を押してからしかし身を引く。

「まあ、いいか。俺も十分だ。商談もうまくいきそうだし、お前は突然甘えてくるし、あんなに嫌がったパーティに行きたいなんて言い出すしな」

男は満足気に言い、いつもどこか哀しげな美貌を今日という日はふにゃと子供のように緩ませている女を見やって、幸せに浸っていた。順風漫步とはこのことだ。

くしゃくしゃの金色の包み紙だけが朝日を浴びることなく握り締められていた。

back home*1

めかした今宵はパーティ

女は従いて回って疲れてしまつて

男は送れなくてごめんなとキスをする

パーティの夜は出会いの魔法

男と女は猫になる

猫はじゃれ合い黒と茶が交じり合う

夜の一刻魔法は解けて

猫は家に帰っていく

次のパーティが待ち遠しい

今宵はめかしたパーティ

「好き…」

ぎゅ、と抱きつく女の柔らかな茶の頭を何も言わず男はくす、と撫でた。

街の隙間、陰に隠れる猫の数匹、影は男と女の一つだけ。

「名前は……」

「野良猫に名前があるのか？」

名前なら知っている。だけどそれは人間の名前。

口溶ける銀の贈り物、抱擁していた女を離す。

「さあ、お帰り仔猫」

「次は……」

ふ、と笑って、そ、となにか握らせる。

「どこかのパーティの夜にまた」

女は暗い路地裏を出て行く。男は暗い路地裏に消えていく。

夜空に星達、黒の背中に金色の包み紙。

甘いものは嫌いだが

ただし除くのは焦げ茶色のチョコレート

好きなときにポケットから取り出して

気ままに食べれたらいいだろうな

「お帰り、」

いない筈の夫が微笑んで迎えて女は驚く。

「ああ、たまにはお前と帰ろうと思って追いかけたんだ。見失って俺の方が先に帰ってきてしまったな」

「あの、」

「分かっているよ、また道に迷ったんだろう、全くお前は」

そう笑って頭をぼんぼん叩いた後、いつもと同じ台詞を言う。

「今夜も送れなくてごめんな」

哀しく微笑み優しく手を伸ばす。

「外は冷たかっただろう、暖めてあげるからおいで」

「ごめんなさい……」

「どうしてお前が謝るんだ？方向音痴は屋敷に閉じ込めていたのが悪いんだ。お前がどれだけ道に迷ったって、俺は待っているからな」

胸に抱いた茶金の頭を見つめて男は言った。

知っている。

いつも同じチョコレート、溶けるほど握りしめて帰ってきて、挑戦的なキスマーク。

隠すどころか見せ付けて、お前は俺を嘲笑う。

『お前に地位と財産が失えるか？』

『愛する女の為に愛する女を失えるか？』

『金も女も自分で手に入れたものはなにもないだろう？』

俺から全てを奪うこともできるのに、お前はそうしない。

あいつの為俺の為。

いいやそれがお前の愉しみ方なんだろう？

お前好みの洋酒のチヨコレート。

ヨーグルトの肌に膨らみはマシユマロ、髪はカラムエル瞳はキャラメル、抱き心地が愛しくて、一度抱いたら離せない。

「ふわわ」

こんなに可愛い、お前はあいつの前でどんな表情をする？

「ごめんな……」

ふあふあ、と何も知らずに猫は鳴く。

ひとつひとつまたひとつ、たまっていくのはチヨコレート。

缶を覗く度に羽生えて

一夜一夜また一夜、たまっていくのはあなたの体温。

もう蕩けてしまいそうなチヨコレート。

ドアを開かずその背を見る。こっそりとらしく缶を取り出した、化粧鏡に写ったその顔を。お前はチヨコレートに向いている。どんなに優しくどんなに待っても俺には向かないぴんくの微笑を。ああそうか、抱かれる前にそうやって、だからお前は瞳を瞑る。そうして違う男に抱かれていたんだな。

信じる友に愛する女。信じた友に愛した女。

「ごめんな……」

すうすうと眠ったお前。俺がベットを離れても幸せそうに眠っている。化粧台を引き出して、力カオの残り香を消してしまおう。部屋いっぱい甘い香りに満ちて、最後の甘い夢を見ればいい。

一つ一つ増えていった、一つ一つ砕かれた、甘かった俺の思い。もう捨ててしまおう。

粉々になったチヨコレート。

「ふう、ふうっ」

部屋の隅で膝を抱いてずっと啜り泣いている。

「なあ、ごめんな。ほら、同じの買ってきたから」

お前はずっと泣いている。数箱積んだチヨコの箱に見向きもしない。

「ふう、ふうっ」

なだめようと頭を撫でたらいやいやするように頭を避けて余計縮こまった。

それからは機嫌を損ねたように口も聞いてくれなくて、今夜は仄明りに見合つて優しく抱いて仲直りをしようと思っていたのに、脱がせようとするといつもは目を瞑ってされるがままなのに、嫌がつて身をねじった。

「いや、いやあ」

逃れて数歩下がろうとするが、掴まれた服がぐい、と引っ張られてそれを許さない。それでもくいくいと自分で服を引っ張って、敵うはずのない小さな力一杯に抵抗する。

なあ、俺が一体何をした？お前が俺にしていることと俺がしたこと。

「お前は分かっているのか、自分がどれだけ我侭なのか」

「いや、いやあ」

ぱあん

両方がその音に驚いては、と止まった。それから彼女がゆつくりと頬に手をやり抑える。

「ふ、」

赤ん坊が泣き出す瞬間のように顔が崩れる。しまった、ああしまった、と思いながらも余計無茶苦茶な気持ちになって、手首をぐいと乱暴に掴んではずすとベットに体を縫い付けた。いつもは丁寧に剥がしていく服もばちんばちんとぼたんがはじけ飛ぶほど性急に怒りとは別に妙な興奮に駆られている自分がいた。こうしてしまいたかった。そんなことを思ったことは無かったが、沈殿していた泥がぶわりと一瞬に澄んだ水を泥水に変えてしまうように、ちりちりと積もっていたものが凶暴な衝動になって現れたように。

比べられている。敵うわけがない。それでも俺を選んでくれないかと、伝わってほしいと。一気に噛んで味わってしまいたい口の中の飴玉をただ舌に優しく転がし、舐めるだけでゆつくりと溶かしていた。だけど本当は 本当は？

これが俺か？このただ凶暴な雄が。涙さえ欲に変えて、力任せに精を打ち付ける。

これが俺か。嫌悪とともに、何か解放されたたまらない快があった。

これが俺か！それは酷い酷い絶頂だった。

ライオンが仔猫を転がすように、でもこれは愛情なんだよ。ただお前が小さいのがいけないんだ。ほら、分かっただろう？俺はこんなに力を加減していたんだ。なのにお前ときたらちっとも気づかないから、それが当然だと思っているから。涙も痣も報いだと、それが分かったら舐めて癒してあげよう。

back home*2

灰のジャケットを羽織るのをじつと見ている。

「今夜のパーティーは遅くならないようにするよ。寝ずに待っていてくれるかい？」

「はい…」

男はふわ、と甘く香る茶っ毛に手を置いて。

「いい子になったね、行つて来るよ」

「いつてらっしゃい…」

灰の背をじつと見送る。

*

「近頃は連れて来ないんだな、パーティーの都度に見せびらかせていた愛妻を」

からかうような声に目を向ければ、壁に映ったウイスキーロック

片手の姿は俺の影ではなく黒背広。

「喧嘩でもしたか」くす、と独特に謎めいた口元。

「まさか」驚き見せず笑つて返す。「危険だつて、気付いたのさ」

「賢明だな」琥珀のアルコールを少し揺らして、微笑のまま答えた。

「お前こそ、パーティーによく顔を出すようになったな？」

「気付いたのさ、危険な遊びに」

「遊び？」少し眉を顰めて男に問う。

「遊んだらう？」

ああそうだ、夜の始まりは男と女とアルコール。だけどそんなネオンはもう遠い夜。

「ここにいるのは遊んで欲しい女じゃない」

「そうか？」意味ありげに笑うのは。

「……遊びなのか？」

「この世に遊びじゃないことがあるか？」

眉を吊り上げればあいつの口元を上げさせると分かっているのに遊ばれて。

「お前は何か変わったな」俺が言えば

「お前も何か変わったな」あいつは答える。

「哀しいな……」眼下に広がる都会の星。「俺はそろそろここを離れる」

「ニユーヨークか？」

「いや、空に星があるところに」

「悪かった」

「何が？」

「引き止めなければ良かったと思っている」

「哀しいな……」ふ、と寂しげに俺を振り返る。

「最後にもう一度、二人で飲まねえか？」

俺は答える、

「家に来いよ 妻もきつと、別れを言いたいだろう」

躡けてあげよう、甘えた仔犬に首輪をあげて

従順忠実な犬が好きさ、気まま勝手な猫よりも

お前は可愛い俺の犬。

「ほら、お礼をしるよ」

友を招いたリビングに、こてんと傾くほど肩を抱き寄せて、頬の近くで甘い声。

「お前を見つけてくれたおかげで俺達は結ばれたんだから」

少しぼんやりした感じでこくと頷く。

「ありがとうございます……」

「礼には及ばねえよ。偶々見つけたただだからな」

ぴったりくつついた仲のよさをさも微笑ましげにあいつは言うから、引き攣った顔を引きずり出して見てやりたくて更に言う。

「そう言えば式場振りなんじゃないか？パーティではどうしてか一度も会わなかったもんな？」

「そうだな、あれ以来か」

やっぱり顔は剥がれない。

罪悪感の欠片も見せない、ひょっとして何もかも俺の被害妄想かと思っただろう、小刻みに震える肩を感じていなければ。逃げられる前に暴きたくて、嘘と本当の境界も見え無い男よりも嘘をガラスで覆う俺の可愛い人に告げる。

「海外に行ってしまうんだ。帰ってくる予定は無いらしい」

ぴくん、と犬のように可愛く耳が動いて震えが硬直した。焦茶の簾から覗く、茶のほくろの一つついた柔白のそれを早く噛んでしまいたい。お前は俺のもの。あと少して今度こそ完全に。

「さあ、お別れを言うんだ」装ってもどうしても口元が笑んでしまふ。

勝った。勝った。初めて俺はこいつに勝った。お前は尻尾を巻いて逃げるんだ。

「ふ、く」

しかし止まって数秒、蛇口が破裂したようにぶわりと涙が落ちた。
「おい」

俺の腕を離れ、コーヒーターブルをたつと乗り越えて向かいのソファに　ソファに座る男に飛び落ちる。しがみつく。白シャツに拳で皺をつくり、胸に顔を押し付けて子供のように盛大に泣き出す。
「ふわわ、ふわわ、ふわわ……」

あまりのことに呆然自失としていて、しかしあいつはその瞬間さえ変わらない微妙な微笑の口元のままに、あまりに自然に茶の毛を撫でる。

「すまない、後遺症のせいか情緒が不安定で」

「こいつを譲ってくれねえか」

「え？」

余りに変わらないその表情で、予定調和な穏やかな口振り。泣き声さえはたりと止まってあいつの顔をぽけんと見つめる。

「猫が一匹欲しいんだ。隠居して一人じゃ寂しいからな」

男は微笑のまま自分を見つめる薄茶の瞳を見つめて言う。

「こいつも俺に懐いているようだし」

「お前　なに、言って……頭、おかしくなったのか？」

「そうかもな、」くす、と男は笑う。

「女なんかよりこいつが欲しい。この猫と遊べればそれでいい」

「そんなこと　、そいつは俺の妻で……」

あいつはもう一度薄茶の瞳に目を向けて撫でつつ言う。

「なあ、全てを捨てろよ。何よりも俺を選ぶだろう？」

女の涙は引いて、信じられない奇跡が起こっているような顔で必死にくくくくと頷いた。

「身一つで来ればいい。余計なものは何もいらない、ずっと一緒に遊んでいよう」

「はい」

かたんと男は立った。

「待てよ！そんなの、認める訳ないだろう！」

「ここで認めるか、全て失って認めさせられるか、だな。面倒だからここで認めて欲しい」

男は初めて微笑を消して、冷やかな黒い眼で差す。

「お前を認めている。去ろうと思った。が　これを見ちまったら置いてけねえよ」

その白肌の首を回る紫を男は哀しそうに舐めて愛しそうに口付ける。

女は男に抱かれながら自分をじつと見た。

「ごめんなさい……」聞き慣れた言葉に、

「さようなら」初めての言葉。聞きたかった初めての言葉はそれじゃない。

「じゃあな」

それで、行ってしまった。

あいつはぎゅ、と顔を押し付けて、あいつはそれを慰めるように撫でて、一つの影は振り返ることなく行ってしまった。
行ってしまった。

『あいね、あいね……次は人間に生まれて来い、そうしたら』

夜空に星を見上げよう

チョコレートをはさんでお前はミルク、俺はコーヒ―

二人で肌を温めよう

星空の下じゃれ合って

青空の下じゃれ合って

いつまでもいつまでも

生まれ変わっても

二匹ずっとじゃれ合っていよう

猫、猫、仔猫。小さな子猫。戻ってきた俺のねこ。

『ずっと一緒にいよう』

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6554o/>

ねこのあいね

2010年11月8日20時55分発行